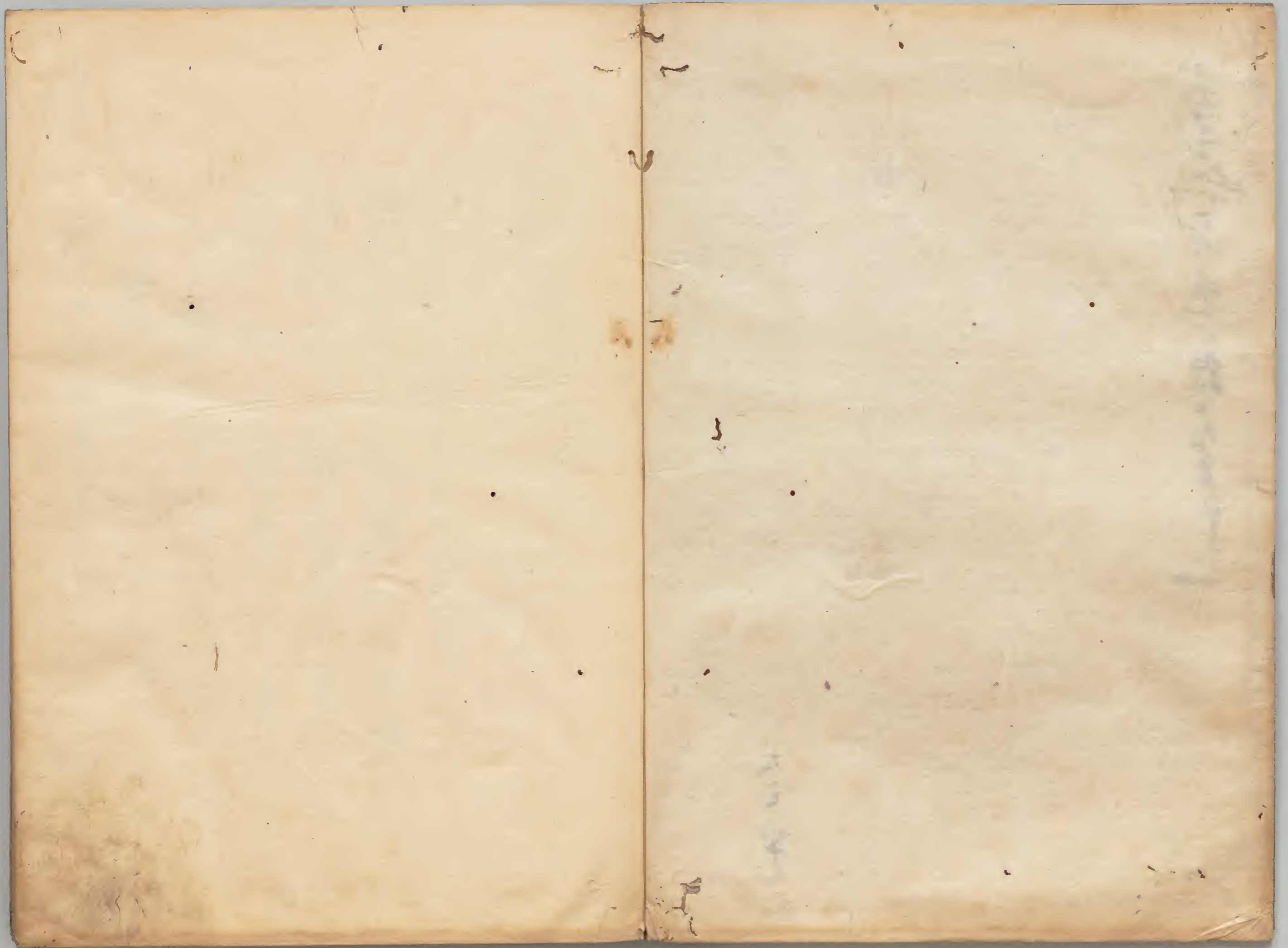


和書門		二五五五	類
一	二函	二五五五	號
三六册	八架		

庫文閣内		和書
二〇〇函	二五五五	類
二四架	三六册	號

内閣文庫	
番號	和 25555
冊數	35 (13)
函號	200 215





支本和禱抄卷中十三

秋部四

題

月

秋風

秋夕

駒込

野分

秋夜

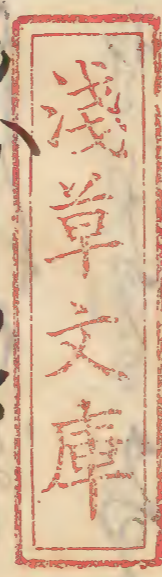
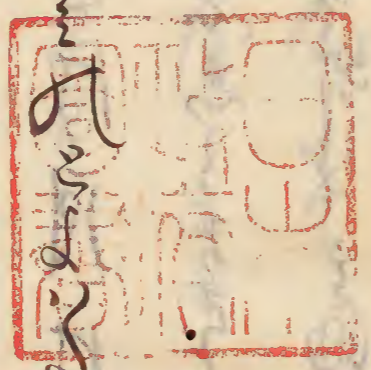
霧

露

秋籬



月



秋の月よとてあはれし

内集月と

法性入道同白

入日すこころしき

と秋の月よとてあはれし

秋分中万八

大印

秋の月よとてあはれし

久保百三

和冬儀教長

月のひかりのあまらるるまじく
あまらるるまじく
あまらるるまじく
あまらるるまじく
あまらるるまじく

元永二年日名丸文判若原尹時

夕まやと津かふるまじく
まじくは月はひのまじく
判名あまらるるまじく
あまらるるまじく
あまらるるまじく



いふあそ月まじく
まじく

卯月のまじくの申方三
中納言家持

天の原よりまじく
まじく

依月方申方の
まじく

まじくのまじく
まじく

日方上
人丸

夕月如曉 扇を乃 而は以て
我牙は成ぬ 衣成るん

秋集初秋月 物の上人

秋立と行りよ ちかむしとむし
しきて 老をとりけ せき月

秋集初月新 正三位家

あつりり人のまむあむし
るあつりり せき日月の

十音書文 初大納言忠定

夕月如曉 扇を乃 而は以て
衣成るん

秋集初月新 正三位家

あつりり人のまむあむし
るあつりり せき日月の

秋集初月新 正三位家

あつりり人のまむあむし
るあつりり せき日月の

秋集初月新 正三位家

くさうすにやうとされハ夕月也

晴ても朝もかりらなりきり

十音書交 年道法師

そくくくすくくくくくくくく

皇のむらりのくくくくく

遠く七年四月五日 和申納を

旭のそ月は今夜とくくく

えき地をくくくくく

和申年百 為家

あまのりまのきくくくく

にやうくくくくくくく

日 冬儀為相

宵のくくくくくくく

くくくくくくくく

讀月或の夜十 同

ゆんくくくくくくく

月よのくくくくく

月の中 和申納を

月よりぞの公のつらき
ぬ涙もろく

言振額新六一
光俊部下

下はくどあは定すは
月を約し

花月百首
定家

かきよは秋きて後の月れき
お月つらきもあはく袖の

治承二年七月
順徳院御製

あふる遠山人さくさく
秋の音月

後京極権政

旭風
光とせしは神の

言後天皇
後久我入政

あふる
あはく月

歌集万代
後白河院

も川やそのうらやまをさへて
なすも流る月とらんはれ

歌集月前松 土の山幸ね

立回山月をあるりちうあて

春のうらやまの川をみ

歌 中納言家持

うらやまのうらやまのうらやま

あそらけの月の影を

和歌二年百々山月 鳥家

いわる、春けけけけけけけけけ
山よりゆくは山のしき月

曆慈三年朔詠百々山月 和歌 月

山の端のうらやまのうらやま

まじ歌くと地の和を月

歌 噴後世

大ともれはうらやまのうらやま

うらやまのうらやまのうらやま

詠月うらやま 坂上邸女

山の隅乃あけ給え申とて天のつら
とつらるるむらりんそて

詠月方万六

千里

わさしともんあなと月の山は隅
てり海りつあなそそ

月主と年畜入

日

てる月の都よるあなそそ
あてゆえんそそあなそそ

月照河公玉珠

日

てる月いびりあなそそ

いとあなそそあなそそ

背立和

大納経信

久々のあなそそあなそそ

いとあなそそあなそそ

万そのあなそそ

大納経信

秋のあなそそあなそそ

けあなそそあなそそ

遠久あなそそ

家長

うらまゝにこころをばはるる
心のかげを月をわら

山月 同
うらまゝにこころをばはるる

山月 同
うらまゝにこころをばはるる

山月 同
うらまゝにこころをばはるる

山集月 同

うらまゝにこころをばはるる

うらまゝにこころをばはるる

山集月 同

うらまゝにこころをばはるる

うらまゝにこころをばはるる

山月 同

うらまゝにこころをばはるる

うらまゝにこころをばはるる

八月十五夜月 同

うらまゝにこころをばはるる

湖の舟の老も若も白くも
月のうらみよ 雲風せし

建久七年(百三十一)

衣笠内下

月れい先何とらと立秋の舟

我こそわつと山のく乃月

正治二年(百三十二)

後東極坊改

かろえ地や湖てる奥よせりて

月の妙よ越りせりし

宝治二年(百三十三)

後の糸内下

湖てる名よゆりの船れり

月よあまの遠のうらみ

日

高家

遠らる所もんを湖てり

月の妙よ越のうらみ

中務心親

月あまのうらみの遠いよ

月あまのうらみの

建久七年秋大僧家(百三十一) 糸中納言定家

長船舟のうらふ流らふ月をら
人と秋との別をせむら

日年百々

同

ありつ月のあるー我ひら
花こそわらへともらわら

日

いさくはふらひのちちて園すん
あさくげとせも月の又み

秋夜中月百々

日

うら先をた月のり流らふら
はらと心のそそよーらわ

宝治二年百々

為氏

はら流らふもあさくりれ秋の束れ
月の湖で流らふら

秋夜中月百々

くま、せー公の海うら
うらうらうら月とあさく

日

日

ささゆりさき海よささゆりの月
ささゆりさき海よささゆりの月

元月三十一日

後系極修政

中くよ月のささゆりさき

ささゆりさき海よささゆりの月

中集

後系系内下

山のささ天の河原のささゆりさき

月のささ舟もささゆりさき

建徳八年百三十八

新上納を修政

ささゆりさき海よささゆりの月

極ささゆりさき海よささゆりの月

仁徳二年好幸文判を修政

ささゆりさき海よささゆりの月

極ささゆりさき海よささゆりの月

屏凡ささゆりさき海よささゆりの月

遠系もささゆりさき海よささゆりの月

極ささゆりさき海よささゆりの月

ささゆりさき海よささゆりの月

貫之

久々の月紙をなまよひかへ
極もよきそ成ぬるをくわ

月十五夜

新波るしつかうれにのぼ

あふ月をくらよきるに

六折紙新六二 夜置田下

天のほろをり月のくら塩を

満よきしれふにの

日新六 光信下

我のむしあーのあまの

この今来う月の

日 信実下

るまにれよひあう

のどしよられ月のひる

貞永元年月新六二 長瀬下

たよし山秋のちをれはの庭

月つけを乃ひりの

院前中一集文 法下新清

山枝のむらさきのさき
かきよもあつて月かき
現存云々

衣笠田中下

名よきもさ秋のさきしの一
とくりきくすあれ月か

文永二年八月 前出物と資考

くさる紀とわが地のさき
月よやんせんせくかみ埋木

衣集百三十一 後二信家謹

あつても地のむらさき
とわが月よ衣うけらん

衣集秋中 建礼院右京守

名よきも地二衣のおも
とくもみくちよ月のさき

衣集秋中 定家

秋のわらひけいあきわら
いまりい浦乃とちりきり

衣集月能と記とあり 衣集一人

こころのこころにけりよありては
わきて月をみるもやまわらん
お音書交り
お湯洗敷衣

せくまのねはよ月のありては
しりしりよる候しそのるを

永久元年の奇山に秋月 後久我を政ちり

あまのせよ古来のの奥の娘乃月
誰かは言ふ事又さるる事

深山勝月 大花つる家

花のよきもはなれしはなれしはなれし
よ来よはつるまの乃月

月正書交り 慈徳和尙

さうせんしはなれしはなれしはなれし
月よまあるみしはなれし

花月百々 定家

月新を娘もちよくのあはれ
本あしつみしはなれしはなれし

光長院に京親と家守と 同

じりりたる家もく程のまきれ

月と夜もまねくそぞれ

あつちの月 あつちの月 安政の流雲

縁へのゆきもやあそび

とちりもあつちの月

あつちの月 あつちの月 前大納言澄房

あれはりの月もあつちの月

あつちの月 あつちの月 殿番門院大権

あつちの月 あつちの月

あつちの月 あつちの月

あつちの月 あつちの月

花月百首 花月百首 定家

あつちの月 あつちの月

あつちの月 あつちの月

文治三年 文治三年 西三信

あつちの月 あつちの月

あつちの月 あつちの月

元元三年 元元三年 為実

ふよきりりりり福まらの月也
しるしーさ山のうのれ松風

山集月ありさか

花山流御製

我やそのわのう板すんそ
くまうてーとねの板の月

家集

大宰大貳之遠

小倉山下草まうても移とこあ
ふよのうゆるねの板れ月

移りらん
一丸

君さうさうさうさう我をれさ
ね風さうさう月さうさうね

日万十一

さうさう月さうさうさうさうの
あさうさうさうさうさうさう

日新立

夜道因下

さうさう月さうさうさうさうの
うさうさうさうさうさうさう

日

信実知下

まめの月たてしかの天守の海
うまふけく吹りしむらり

海上月寄花抄

冬蓮法師

月影よ塩きらわきしは難波の

さひくもふあすのつりあ

花抄下

浪のよしわのあすあをぬき

ゆらりくさあすの月つけ

家集月寄

西行

身さゆるゆきのせまな風さけ
あのはらよきじしら波

日

池よすし月よくわる海をな

しんひのせれこしひありきり

子音あす人

慈積和尚

わらうしのねる地波の花よれ

月よさうしる廣沃のつけ

六百五十八廣沃池絶句

後京極持政

公の付じりてそむらひ斗れ
月よぢりする。廣決のつけ

皇二年百歳

新玉のたまはる

又やうんあゝのせとのうきさき
波の月れゆゑのちかつけ

月方中

未儀雅朝

秋はと水浦のゆゑの波のよ
月よぢりする。廣決のつけ

家集

後成

吹さらふあゝの風よ言はせ
名うりともする。皇明の月

山集

後成相成御歌

あけこゝる境ひもさの
いかに漆の夜のあけ月

新

西園寺入道公歌

あゝとやうもあゝとあゝとあゝと
形よのあゝよのあゝ月

日

源師光

照月の一がれきりのあつた
屋すゝいもきあまの入舟

家集 後二信家澄

すーあれいあーあつたよきとれ

月とじいあーあつたーあつた

白野社百そり 後多明院少判衣

白あのおりそりてゆつ。本同より

月とじいあーあつたーあつた

建仁三年和号百そり海月 後之我を政ち下

月とじいあーあつたーあつた
月とじいあーあつたーあつた

百そり 慈然和尚

月とじいあーあつたーあつた

月とじいあーあつたーあつた

文治五年和号百そり 後成

たあつたーあつたーあつた

たあつたーあつたーあつた

家集 伴勝

いさよもくありするひのさか
吹井のうらや月年りりる

日 同

と津丹を吹くくくく
月のくくくく

建長三年八月廿二日 家隆

柳よりひけーまのまのま
そのこのこの月とありす

日 同 三信家衡

びんやれ浪の千里のさ井
月一吹井の地のうらや

後東極持政

清見の波の千里のさ井
さくく袖のうらや月新

日 同 氏平と為家

いくとせの雷とくくく
名もさる浪の秋れおの月

日 同

と海もなほ月のかきよる厚の
しげよきしとらひ斗るれ

日 同

難波の月乃光よ浦さへ

浪のかきよるありき

日 同

月すもい音もせしむるし

峯吹くしむるし

日 同

光よなるも月せしむる
猶しりりありき

日 同

月すもい音もせしむるし

峯吹くしむるし

日 同

月すもい音もせしむるし

峯吹くしむるし

日 同

こら ^{こら} 少くもりもするくらぐら

えんそりーいせり ^い 杖の書月

友集所仲おの家すき月 後頼朝ト

戸袖もくろくろく ^い の清き

くくける月 ^い 成す海き

月 ^い 中一 日

吹月 ^い もあ ^い ら ^い の ^い 書 ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ

えんもあ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ

貞永三年八月三日 ^い 友集所仲おの家すき月 友原頼朝

美 ^い よ ^い う ^い こ ^い ら ^い ら ^い ら ^い ら ^い ら ^い ら ^い ら ^い ら

水 ^い の ^い 月 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日

七永三年八月三日 ^い 友集所仲おの家すき月 藤原為美

空 ^い も ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ

月 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日

老 ^い 後 ^い 月 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日 ^い の ^い 日 道令法師

つ ^い も ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ

あ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ ^い せ

法性 ^い の ^い 入 ^い の ^い 園 ^い の ^い 白 ^い の ^い 鳥 ^い の ^い 文 ^い の ^い 友 ^い の ^い 友 ^い の ^い 友 ^い の ^い 友 友仲

くわりのつねにこよひふむらで
先のつらこそ月...
威方朔

威方朔

任吾れ去の本末をえわさきは
くわりのつらこそ月のつらこよ

賀茂政平

よみものつらこよのつらこよ
くわりのつらこそ月のつらこよ

澄縁法師

久安元年七月廿九日

いづれにわの月よりわん
はのつらこよのつらこよ

い平判若清補朔云右平
本侍...
法眼金

弘安元年八月廿九日

池のつらこよのつらこよ
わのつらこよのつらこよ

い平判若清補朔云文集

侍わ風風池上月送我こよ山

と申すはれはむかしはあつた
ともはれはきしはむかしはあつた
い他はの月とくすはあつた
と申すはれはむかしはあつた
この月とくすはあつた
れはむかしはあつた

源方二年三月廿二日 源通結印

ぬとにむかしはあつた
あつたはむかしはあつた

けり判若し後成りてはあつた
常しはむかしはあつた
是の月とくすはあつた
の月とくすはあつた
と申すはれはむかしはあつた
あつたはむかしはあつた

源方二年三月廿二日 源通結印

ぬとにむかしはあつた
あつたはむかしはあつた

け初判若春後云右を此井の
麓よりつる山の名もあつくる
の名こそまじし侍連はとて
林藤とよひ侍つともや名も月こそ
これよりきりともある船恒つきの
乃鴻とけりともよみあはせり
しを侍くれふ人の年より
れともまねし人のつらと
侍連とまじ

保延元年八月庚子文月

陸中細谷經具

名もりもと東の朝れあはれ那
月のつる乃花よりとも
け年若神祇伯取仲とて右乃
年よりこよひのつけり侍
ん部とこあて末はあつと
残るはつせれともまじ
死ともまじ侍ら又月のつるの
花はつりつるまじ侍ら又月

のろくとも秋の紅葉とさうも
てゆめ連古事云々
あぢわ久々の月れろくも花や
咲くんとより春の花さく
あやもん給ふまはの月の清
乾桂花光とつくりされし
よきある海きよや

秋集月夜

為頼卿

秋風よ東や更わらん大地よ

月のろくのなひくけみの

秋集

定家

あそこの代ややま久方の

月のろくの花ともやも

大正十一年八月

源仲正

海もよのちのけもあつた

あふくもあふく海の東をなま

大正十一年八月

月

ろくろくあさまに給やうつひ

さり月よりにれぬ中うり

寛文五年壬戌月亥

後三任頼政

妹よとまこいしうらら地うら

松のうらにやとる月乃那

判若松のうらとらうら

山地とら

建文元年丁酉

信実お下

月乃那のうらとらうら

心とらとらうら

建文元年丁酉

定家

さり月よりにれぬ中うり

月よりにれぬ中うり

承久元年丁酉

日

大さの嵐もさす

その中うらとらうら

日

さり月よりにれぬ中うり

心とらとらうら

月事拾遺 秋月明風の冷 急積和尙

秋のあそびをくりり月よそかきく

秋よ涼しき山甲うらのせ

和らふ海を月 後鳥羽院御歌

りろく山人とも甲しん

き通のまのまの月

和集月事 高家

天の原えきりふくふか

くくくくくくくくくくくく

和集月事 和入納をかせ

急と波をい本末のけけけ

くくくくくくくくくくくく

和集月事 頂法院御歌

立回山甲をいまのまをい

うすきかすくくくくくく

和集月事 同

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

日

月

家へのなるかへん
しつぐも秋の月

久永十年 考家

宿りきり 光あふる月

のり洞よき

子音書

兼蓮法師

名林くさひのあふる月

結しきりよ流るる月

日

野宮

晴るる 雲ささる月

久米路の神のくさる月

正三信

ある 雲ささる月

波よきささる月

日

小侍

なより月よ公のしん

くさる人のきり入る

宝治三年文海色月

位実御下

いとはあるまの雲のいさくきよ

垣られ月と清出くらん舞下

内裏山守秋の月

為家心

つこ山れまのの点柳の下にけ

月のけゆる秋のしゆるゆふ

建仁元年十月山家秋月

急後和尙

新清き月よりゆる袖をらぬ

くのきはゆる娘の山の端

建仁元年十月山家秋月

兼連法師下

山の端と朝の梢よすみさく

さるりゆるりあけの月

平治二年十月

兼大納言忠房

斬るにまのさ海とむらじ

うゑのうらよりゆる月け

河内橋の夜百そ

大納言信通

峯れまゆるあしらのまらり

けさゆるあしらの端の月

後之徳行徳

山雲のちるや風りまひくらん
新ふのまゝぬ夜の月づね

後之徳判

山新法師

竹の葉はうらた色よ音つね
身吹くまゝの月づね

秋意

指津師隆寛

老くのまゝなげわとあつら
かありとや月づね

後之徳

他阿久人

千のまゝ光あつらとあつら
老くの月の新とすくまね

久能七年秋十を交ふ

後の系内下

表のまゝのまゝのなげわとあつら
老力の時をよねの末乃月

先のまゝの入道徳政百を

定家

秋の月づねのまゝの七十年
あまりてものまゝのまゝ

述古の年一毎の三三

為家

水とや月のうらよ

影のうらよの川舟

久永七年一毎の三三

同

月の影道も影のかけらん

やう一をともみぬけら

家集舟中月

同

うらよのうらよのうらよ

月うらよのうらよの川舟

白方中

同

うらよのうらよのうらよ

影のうらよのうらよ

正徳二年一毎の三三

家隆

えとや月のうらよ

みどりよとやのうらよ

家集月夜

同

秋風のうらよのうらよ

月れとや人の影をうらよ

建久八年十月廿七日

定家

秋とくは月のかげをさくはる
きよきよきよの久きよきよ

同

あらしを月かげにさくはる
よのけあるよのきよのけ

文永十一年十月廿七日

為家

月とあし洞やあしあつらん
秋のよけをさくはる

同

同

たけのけよあつらんしあつらん
月とあし洞やあしあつらん

文治三年十月廿七日

俊成

月とあし洞やあしあつらん
都のよけをさくはる

文治三年十月廿七日

兼家

月とあし洞やあしあつらん
都のよけをさくはる

五集

後三位家澄

乙卯月の十日あり乃之のけり
川をみちうくすまの月ふ

信補部下

くもりをに梅すそれ月や天す
こよとつ姫のこに物さす

日

同

久しにれあめのぞとやさるん
秋のちよとらもる月さ

五集

後系持信政

けいさのよのむのなす月さ
池よとつ一の乳そのこ

五集

光俊部下

池の木の月とらよる人
杯のさしそぬ廣はの池

月を

他阿上人

朝まらりけりる月のうに
さうくをさるるさうく

正徳三年田舎月十六日

為道お下

ふるまゝにゆりぬらむをよめて

白きまれくる秋の木の月

前中納言為道

遠く千里のあゝしりりり

月すゝはる木のきりりり

えんえんめい

えん

みゆりのら雪あゝあゝあゝ

秋よりりりり雪のりりり

文治四年正月

同

月清き雪のりりりりり

ちりりりりりりりりり

九月十日

同

山風の月のまゝあゝあゝあゝ

むらむら雪のりりりりり

建保三年正月

信三信三

白妙の月のまゝあゝあゝあゝ

秋の木のあゝあゝあゝあゝ

歌集新添室

年、蓮法師

心せよきと

月づかづる年、川、名、瀧

建保三年、み、お、百、き

俊成

光とす、里と、より、ひ、て、す、む、月、の

新と、み、く、る、玉、川、の、ら、み

室治三年、み、お、百、き

俊二位、新、成

好凡の、未、吹、る、ひ、く、す、と、記、す

り、む、け、よ、の、こ、る、月、の、新、く、る

文治三年、み、お、百、き

俊成

旅の、色、の、ら、り、と、月、よ、ひ、と、く、も

し、や、こ、い、ら、ん、を、板、の、用

長由、入、る、京、新、と、み、お、百、き

未、と、納、を、屋、房

何、方、へ、と、み、や、ま、し、故、の、和、を、

や、も、も、あ、ま、る、月、の、光、成

日

若、大、納、を、屋、房

秋の、和、と、月、す、む、の、よ、あ、る、雪、は

な、ひ、く、月、も、も、あ、ま、る、月、の、光、成

のちのち

後成

秋の月ひるといふとて

雪とくらくく夜

音も交

二信家

今もくくくく月

おとくくくくく

けり判る云裁安道常の事

くくくくく

弘安元年

後九条因

玉とぼり形見と女一人の

いとくくくくく月もすま

弘安元年 法橋

くくくくく公のくくくく

くくくくく月とくくく

弘安元年

二信家

海のくくくくくく

月の光れくくくく

弘安元年

有原尹嗣

池原にふるさつに月をうらみ
けしきとりてうらみある物

火久三年の月をゆく

文月

之祐法師

いほとてもよやけりらん秋の枝の
月よあやうく人もまじりぬ

家集

あはれ

月よふるさつあはれもはらへし
かこころのがさよめし

建永三年の月をゆく

建永三年の月をゆく

はらへしつて洞井とさぬ人もあはし

かこころの月をゆく

かこころの月をゆく

中三親王

あはれもはらへしつて洞井とさぬ人もあはし

かこころの月をゆく

日

後京極持政

秋をれいもそよめしと袖の上

あやうき月をゆく

日

後久我大政下

ねいさ秋のしすくは風のまよ

ねさくくくろのゆづれ月

弘安元年一頁

後久我大政下

秋葉のけしきをうけしるまよのよ

こぼれしは月をうけしるまよ

日

弘安元年一頁

秋風のうらみかきぬね葉のまよ

しほゆかりて月をうけしるまよ

文集百首

定家

あつらふりも葉のゆきりまよ

庭の色も月のしづか

九月十二日内裏山と山海月日

まがこのねもかりあはまよの花

まがれしはまよふ山の月しづ

後久我大政下弘安元年一頁

定家

浦てきる月のうらみのまよ

うらふはのねくのねりせ

日百

急須

本のもた月も光をうつけて
神さみもるのま

集

家隆

峯もまのあまの成中
入もまのまのま月

日

傍頼

紅雲らる清瀧河舟かて
らるる月線

此年九月十日大井

りて清瀧川の清り

くくま有年の梅は

あまの月とてあま

くくまの月とてあま

くくまの月とてあま

久安百

久安百

九月の月れまのま

ゆくのまのまのま

山集九月より月あらず

花山院御製

秋少きものありは秋の久世より
さねかみけしるのりみぬらん

駒込

堀川院御百首駒込 権中納言師時

びくさるゝお坂のりらるゝ
駒込人ともいへるくらむ

日 修理中納言師時

川後と磯田の長橋を眺む

く海びくもるる月の子海

はあ二年の経たるる人百首 澄源法師

おぼよしりる駒込川をけ

さねかみけしるのりみぬらん

日

くもりおぼよしりる月の子海

さねかみけしるのりみぬらん

堀川院御百首

く月の子海を眺む

おき井のうらむの川ふのこま

去帳頭新六一

為家

ふよふふふ本なるの枝川

うねのこむやあし

八月あきのら

信長部下

川ふふふういふゆふ月

おき井のうらむの川

辛き言

家長部下

あふふやふまむのうらむ

うらむのうらむのうらむ

去帳頭新六一

信長部下

おき井のうらむのうらむ

あふふのうらむのうらむ

去帳頭新六一

順

武藏野のうらむのうらむ

うらむのうらむのうらむ

去帳頭新六一

好忠

信奥のうらむのうらむ

うらのの弱もをりきわん

中原頼成

凡うのうのなまきふり川すな

き井あまゆら月乃弱

家集

人丸

秋これいふ乃山まき事哉

海とうこつる波うあぐ年

い〜〜〜人〜〜〜す

あまのうかりあまのうかり衣るにそ

く〜〜〜山路のあまん

い〜〜〜福海と

心〜〜〜我恋あや〜〜〜色ぬり〜

あまの秋〜〜〜あまの袖か

い〜〜〜人〜〜〜

まや尾むふ〜〜〜秋まり乃

あ〜〜〜人乃〜〜〜哉

中流直下家前我山林

同

物に寄られも是引乃
山橋のりりもつりす

あしす 同

心よ我さひるや秋まらか

ももきくする物山をさる

古松 三信

あまのきんたてのきんたて

ももせのきく目殺りか

寛文元年 高田屏凡 同

あひくる乃物事ありわ

はらりさ初厚乃か

百三 慈徳和尚

山田の心よ朝きりか

稲よの凡よじりわ

あしす 同

心よる秋の梢とさる

あしすの心よつり

三百年 同 好忠

大ひこやまひえの山も杖くれち
とよのこもみくもとつ乃邑

坂川院百々
か中納言通房

河務の都のうらと海をぬれん

ろこもみくもとつ乃の山里

百々乃
西宮法師

徳川のうらと海をぬれん

はか乃川宮をぬれん

信頼

えいれきかてあそく神山乃

よあそくあそくの下乃杉葉の

隆源法師

かきのきこれすこよ成はる

きりーとくろり乃の

少集
後東勘持政

けりるあつみのこよと詠せ

又あつみのこよと詠せ

二
同

あつらふ富よつらふ表を知らん
子思ゆゑ

正治二年百首 慈法和名

紅葉も秋の節を方より田か海

あつらふ深きんをさくく

氏戸心乾元

あつらふれうこときく

くすいこもつらふの松じ

あつらふ冬儀雅經

あつらふも惟ういとんち梅の山

あつらふの芭よ秋よける門

建仁三年老若中を交 定家

婦人の袖、紅葉のあき風は

あつらふも吹き方のよら

式抄中 月

あつらふの雲林麻のあきれあいはれ

あつらふも秋のまけり

あつらふ天正院あつらふ 月

あしらはや波の音方に袖うて
ふしうらへるるくさうき

坂川流る

仲実お下

お坂の雲かみ枝す枝川なれ

もら月の新うら乃出梅

秋子目親と乱交

よき人しうき

お坂の雲より枝さぬきり

ささの福もやまきしん

宝治二年百

東蓮法師下

りき原ひの音ももるるの

町ぬしりのる夕暮のね

宝治二年百

定詞

園こゆるるくく白河の

さくさくもあゆの音も

老翁と交

家長

翠の音もさうき

く福山の音もさうき

建保三年百

東澄

次廣の浦は枯やぐさのしら塩の
潤りさ方のまをそと免斗る

日 傳心新意

夕暮れゆ名のささきさく舟の
かのくまゆのあとのしら波

日 伝心新意

もれゆ、梅さの清風色こころ
いし宇治人の神の御事

秋中 源師光

玉も刈 燈籠のさよよさかいて
夕波あゝあゝのまをす

舟現存云 在長節

まふさの浦の御事くれとせく
しら霞みねあゝの浮少

万代 傳心新意

あゝくれしるの吹井れ御事よ
あゝくれしる天の橋立

二重院 續波

いそ進まぬ海のさぶのクヌサキ
あきの籬とあつね

建仁元年 文 後久我右政宗

うれい又いづよ音よりりの鳴

いよらうらうら 神の秋舞

建仁元年 毎のさし 為家

入るのみのみの事うきやうぬ

きよい光りいぬやーわん

建仁元年 毎のさし 光俊

河の目まするれむいさかき

山はくくよまの秋くれ

毎のさし 為家

物りまよふあのみ秋れ山風よ

いよらうらうら 秋の朝音

同

よみのあみ秋乃音れおきよ

いよらうら 衣志んとしておき

よあ百そ音と 前大畑を隆幸

はるけくしの花の香はさかすか
あかきしるしの花のゆかり

家集秋の中

雲よきりまはし秋の花すま
りのめくあかきあかきあかき

日 信長お

川旁に烟をみそまき
波うちさくさくあかきあかき
けりあかきあかきあかきあかき

て八嶋とふあはあかきあかき
あかきあかきあかきあかき
あかきあかきあかきあかき

日 日

千鳥さく天のさくさくあかき
あかきあかきあかきあかき
けりあかきあかきあかきあかき
あかきあかきあかきあかき
あかきあかきあかきあかき

て幸ひお下りて下さる事申せらる
所へとて毎々お尋ねの御
言ふれあるは侍候のよし
けふよりいづれかお尋ね
よめありまほし

そ是親と云ふ

忠告

涙ありぬきし されに御意あり
書ありよりして 侍候のよし
お尋ねの御言ふれあり

お尋ね

お尋ね

夕暮方に衣いぬきて 暮あけ
信よあるも ありぬ 志ゆり

月

秋の芳山を らくさよ 漂うれる
御言ふよりいづれか

万よ

日

御言ふよものよしを ありて 父言ふ
夜よありて 志ゆり あり

忠告

うらうら川田の白のいさかじ
鳴まき書のうすききり宿り

古板部不知

中務口親王

ぬきし宿もさるしきたのり乃
きりきりしきりしきりしきり

秋風

柿本親信百首抄

徳念中務親王

夕まはみりりのきりきりしきり

下りし

貞應三年百首

為家

風くる籬の草れ下り

うらうらきりきりきりきり

長元三年百首 入るを政太郎

夕まはみりりのきりきり

長元三年百首 為家

鹿元三年百首 為家

山本れ下きりきりあきり

きりきりきりきりきり

とやわ秋十の哀

定家

浅茅生のものより志れ奈ぢるらん

とやわ秋十の哀

遠久を平下百そ秋十

日

木葉吹風の心よざらん

枕よつるらん

玉中

日

此道くると山海原をさし

日新のらん

文集百首固扇：秋十

日

とやわ秋十の哀

心のあはれ

十部百そ秋十

後京極持政

秋の心よ秋十の哀

花をよそむいと

白河院後百そ秋十

日

秋凡のらん

正治二年丁酉

藤原道隆

あけをりてを井の原も公せし

あけをりてを井の原も公せし

建久三年の月主親王を山原 後三位源家

今よりやまの香らまふ山原乃

香ねれ里の香らまふ山原乃

源後平

あけをりてを井の原も公せし

あけをりてを井の原も公せし

後頼朝

あけをりてを井の原も公せし

あけをりてを井の原も公せし

藤原頼朝

あけをりてを井の原も公せし

あけをりてを井の原も公せし

藤原中務卿

あけをりてを井の原も公せし

あけをりてを井の原も公せし

小集

二百辛酉

嫌也

秋風をまよひて思ふ所あり我宿乃

あはれくせむさむのしるま

百々

重之

秋風にひらけぬ人のあはれ

吹くるよひうあはれとて

永正二年七月宗賢の宗賢 素秋 前原茂次

妻此葉の秋吹く風の音きけり

くさくさぬぬのゆいぬきき

久本百々

花園友成の宗賢

秋風よあはれ吹きては

こらとすいひのまの成

百々

秋由院入京親

はてしなく福の板戸に今わ

引まらふ秋風をきけ

建保四年内裏十々 信正 信正

あはれあはれ吉野の行くに吹風

秋をれいとしてききし

宝治二年十月廿九日

任実卿

秋風のけりもあつしむるを

らりりりりりりりりりり

宝治二年十月廿九日

高家

秋の葉もあつしむるを

らりりりりりりりりりり

宝治二年十月廿九日

順徳院御製

秋の葉もあつしむるを

らりりりりりりりりりり

宝治二年十月廿九日

高家

秋の葉もあつしむるを

らりりりりりりりりりり

宝治二年十月廿九日

高家

秋の葉もあつしむるを

らりりりりりりりりりり

宝治二年十月廿九日

高家

秋の葉もあつしむるを

らりりりりりりりりりり

秋風を凡そ吹き 中勢

秋のこれとていふものある物哉
心すもいふもいふもいふも

秋凡そ一

やさしき風をきかぬ

衣のえきとていふもいふも

日六二

秋凡そ吹きとていふもいふも

悲のこれとていふもいふも

日

同

秋風は吹きとていふもいふも

つとめ衣をいふもいふも

野分

お酒

後京極権政

我はもこの木葉もいふもいふも

秋のこれとていふもいふも

音書

日

秋のこれとていふもいふも

花のうらみもさきよのしの里

日 慈徳和尚

びんごり尾花のあま波まき

花のむすぶあつく浪風

日 定家

萩のまゆり一凡の秋のこゝろ

やそ花のあかきさき

日 家澄

しりよきと唐りまてしきさき

花のうらみもさきよのしの里

日 権信卿

夕日暮しきさきよの吹風よ

花のうらみもさきよのしの里

日 藤原道隆

らやの我公もてあわれ衣

花のうらみもさきよのしの里

建保三年秋皇年 定家

花のうらみもさきよのしの里

海

あつたもあひく秋のしるめ
あつたもあひく
高浪

あつたもあひく秋のしるめ
あつたもあひく
あつたもあひく

和歌二年百首

河

あつたもあひく秋のしるめ
あつたもあひく
あつたもあひく

権信正と物

あつたもあひく秋のしるめ
あつたもあひく
あつたもあひく

あつたもあひく秋のしるめ
あつたもあひく
あつたもあひく

秋由

音曲より秋由

後京極持政前を改作

あつたもあひく秋のしるめ
あつたもあひく
あつたもあひく

日

定家

あつたもあひく秋のしるめ
あつたもあひく
あつたもあひく

日

慈徳

日よきく秋の端さつさあなり

何ゆききくく夕暮の由

法橋殿昭

小由さるらくりき秋の由

民の神さくさるりよきり

秋の由 伊勢の由

秋の由さくさるりけはるはるはる

夜よきく夕暮乃由

後き羽衣の由

目線さる秋のじりあきすき

あきの袂もさるりさるり

ちねさる 正之位の家

夕暮れ風さるあきさる

りてさるあきのじりあ

正二年百き 後き羽衣の家

らさるりあきさるりあき

風よきくさる秋の由

ちねさる 正二位保子

心持うけしてそと吹山の秋風了
しるぬすさぬ袖よきうけて

しるぬすさぬ袖よきうけて
順徳院四別家

しるぬすさぬ袖よきうけて
信川のつりかき秋の夕ぐれ

しるぬすさぬ袖よきうけて
考家

秋のゆれけぬそくくしるぬす乃
物事のわらわ風そまうし

日
同

秋風乃ききひてさな時ぬを
海へうけてそくく

文永五年しるぬす中
同

秋風乃ききひてさな時ぬを
ふるさとのききひてさな時ぬを

文永五年しるぬす中
日

秋風乃ききひてさな時ぬを
くもりあわ秋のしるぬ

しるぬす中
考相

あふりきよき葉の凡乃あふりき

くつろびゆくときのも

仙回車そ 後京極権政

あふりきよき葉の凡乃あふりき

くつろびゆくときのも

仙回車そ 後京極権政

あふりきよき葉の凡乃あふりき

くつろびゆくときのも

仙回車そ 後京極権政

あふりきよき葉の凡乃あふりき

くつろびゆくときのも

露

六折歌新六 信実下

あふりきよき葉の凡乃あふりき

くつろびゆくときのも

宝治二年 百首秋夕 日

あふりきよき葉の凡乃あふりき

くつろびゆくときのも

人死

物死出乃言りしうとわらわ

百三十一

急須

秋の意よしじゆ由の角あはく

晴のしむのあう涼しき

後束務橋政

とまればさむ月の月乃くろく

さ葉の角とまらしつら

けし御集之九月九日作文

きよは家房の侍とくろく

ありてさだよのそく

ナニおと侍とれしつら

侍とくろく

中末孝文家房

見しつささ葉の角あはく

さ葉の月れけしつら

くろくささ葉の角あはく

ついでついでに葉の房も散り

はてし海より来るや入る年

夕の井もあつたをそ 徳周法師

うふのあふくまの——うあを

あはるる名のもよこれつね

舟由流入と京親家 舟由流 定家

あふくまを移ぬ舟の月もはるるん

あふくまあふくまのよめ乃りるる

あふくま あふくま 日

あふくまを移ぬ舟の月もはるるん

あふくまあふくまのよめ乃りるる

あふくま あふくま 日

あふくまを移ぬ舟の月もはるるん

あふくまあふくまのよめ乃りるる

あふくま あふくま 日

あふくまを移ぬ舟の月もはるるん

あふくまあふくまのよめ乃りるる

あふくま あふくま 日

たゞのやまをたそがへて白雲の
牙とてきくは秋の夕言

二時秋病中を多松

高家

むらさきの尾花の袖のさるや
か来もほくは秋の夕言

貞永三年百三十九年

同日

とげとろとねらるるあきらむる
し余よほくは秋の夕言

ふそ号

同日

むらさきの夕言の夕言
秋もきくは秋の夕言

秋夕中

高家

あしはくは秋の夕言
本うけは秋の夕言

六百番

高家

あまの夕言も色も夕言
あまの夕言も色も夕言

家集日家約月

後頼朝下

くわせくしとゆふやとれ秋の月
しのかりる家ののらわさるる

建保三年 宗隆

信正の意

ま城ののりあはれ小秋下は
葉ののりる家よやとる月ひ

建暦三年 内裏より宗隆 家隆

人さす都よみまーまの
家とよさるる秋の夕言

建保三年 宗隆 信正の意

まののこ秋とらるるりあわ
まののこ家の流るる人

氏子の範光

秋のうらあまの影よけさく
りーもそらるる木のちるるは

建仁三年 老若を宗隆 宗建法師

叶ゆるる夕日れさも袖さく
山風さるるものしるる

宗隆

宗建

風つらきりしあらし小秋神よ

夕影をよかりし

夕音あふ

ち細き道具

叶由つるをのむしをいかに

八月あみく山のしりあ

日よ今逢

慈徳和尙

あひそそまのしとちひそのよ

公のあはれ根ゆきさく物

久和五年九月三束中務親王歌典侍親子あつ

一丁らよ秋の夕もく

公のあよわさし

泉集述懐古集

和泉或

くけいもさるわよ月のあ

あかりてさつし例とぬん

日

同

まじわくさいあの子かあのみ

あゆみさるあしり

秋のしりあ

中務親王

世にすくく秋のまはりにさあや

いそぐ家のむとあそん

恒久親と家守

友則

うりれ啼うまの空なる洞を

秋の枝乃家とどくらん

建保三年一宗百々

後三任乾宗

むさしつる月つをさくく時ゆり

尾花のうらの家のつ

建久三年七の号を国守家定家

詠うて凡うよさる秋のえよ

月と知家とさすはる日とさ

建久三年一宗百々

後九宗因宗

人との恋れあまよりすく

どのらひのあやうん

家集

おはし人

ねさく原末しものあはまあ

るるさいしなむけらら

おのりまふ

おはし

心をよめるあつらふ家のゆたに別
うらむあきの袖のきくまき
承久四年百とと際 二糸大里交り海
露海きいもさうの原よふ新を
衣のよきよるひく——
猿草書あり 後束極極政
あつらふあふもさよもじまひつ
その梅やあきのうらふさきと

初字百八述懐

定家

いづきじまの月をきくまき
ねるひはくあきのうらふさき

建保三年秋十ととあき禁日

袖わらあきあふりつすりたつたあよ
うらむあきのうらふさき

承久四年百ととと 定家

あつらふあきの玉叶あひすらつたさう
平るしととあきのうらふさき

秋あ中 月

いけりもきこもきこぬ家の
言きしものれらよみもらん

建保三年田舎方人 光の界と指政

月ころなきの春の本らり

梅の足名しる家の文も

唯川流の付百き 仲実物ト

さねもきこりらにきける秋萩と

志の事しせきより家の

控中物と信志の家らるる 信頼物ト

秋萩も家のきこりけり

りくふふふふふふふふふふ

取久定年百き信志と 同

夕まのきくもの成り

春のきこり

文治二年 定年

蘭 菊あらしのきこり

夕まのきくもの成り

秋安中 花山流の菊

秋の花咲きしるまはるの
朝のなみよみゆ

丸集百九十一 大江の里

志のこころは秋の家の空をきれ

ゆきも蝶のまくらん

貞二年百九十一 新らぬをた具

野原より枝より風の音

ゆるりあちる秋のゆめ

日 秋の夜半道法師

うららかな秋の夕に今をこれ

それともすすむつよみ

日 秋の夜半道法師

あつきの時をまてもうりきり

稲葉のりりる宿の夕暮

日 月

誰、又らよらひとくも

秋の心よあきの夕に

日 及もぬれ西割衣

日 たるしるゝ表あれらんりれ

麻とひりの秋の夕ぐれ

えんえん年泊る人 山梨法師

日 かりりしつゝ山とくま

うけの秋のゆめれ

二百番と秋夕 家隆

日 言ぬきはせくもむとくよる

ひりの言よる庭の物な

老の事そまふ 後京極持政

日 畑と秋とるひ入てう縁はれ

おののこそめり夕言のる

日 秋夕の事

日 ちとちとあじりの人れは

あしよひの夕言のる

日 秋夕の事

日 みのちと秋のるあは縁は

あかのしりも夕言のる

古板歌新書 秋夕の事

秋はれは花にさくさくのちかくと
洞よりしりとり言ふ物

建保二年田舎秋の文の乾宗

鴨のふりやほ乃秋の夕べに

うつくふとさるるひささき

湖邊秋夕の文

秋のちか秋の上風さるるれに

うつくしの秋もささきわら

百首の秋の文

蟬乃ちりひのうらさき

春の金た秋のゆふれ

水に三年象文

當らるる木末の日影袖よさき

しるしの夜はさすきり

秋の文

長きよりあまのこころ

さきよあまの秋の夕べ

秋集の文

吹くも風も長と云ふも
しるもすこき秋の夕ぐれ

秋夜

建保二年十一月五日 定家

老の世は長と云ふ秋の夕ぐれ
ゆるのらひも七月の夕

久安 慈徳和尙

しの音と秋をてきも秋をわ
神よさらけ天の月波

承久二年十一月五日 定家

たつ里れらう秋の夕ぐれ
月より夜もすこき秋の夕

和 日

びりそふもありし秋の夕ぐれ
るふ侍の秋の夕ぐれ

和 家隆

あふよ秋の夕ぐれ
の夕ぐれ

久々同書

仲実の書

まうのうもせの書
晴るもあつた
一す万三
と書と性か好むと書
るりくの中もあつた

日十二

家信の

今より秋月さしく
つらつらと書
つらつらと書

秋雜

久々百々

家信

秋もいねまの
屋もいねまの
久々百々
日

久々のひり
秋の表と書
建保二年十月
日

久々のひり
我が時毎と書

いづれ月日もわづらひ秋の

初二日

日

年れうらゝしむる秋のあはれ

心もあはれと人かうらやう

建保三年八月廿一日

清見の降初弱の秋うら

秋のさし波の秋かみゆふれ

高直新云

知家

は連くの秋れうらゝのうらね

やうく日影のうらやう

秋時

新直

うらねうらゝのうらやう

時うらゝの山里

振子音書

後京極

なびくしてうらやうのあはれ

うらやうのあはれ

建保三年八月廿一日

光の峯

うらやうのあはれ

あつとうけうふ秋のききり
或子内親王家文干も 宣方

秋をいして誰か又いへば
よとわふ秋のうらきあはれ

世御

うらんとするやあはれ
神のうらや秋をいへば

相模

いふあてのふ人のすまへ

秋よりかの里残るらん

惟貞親王家文干 千里

秋とれいそ山里こそまひり
よらハ常をいへばあはれ

元方

人しとて国やあはれ
秋のあはれとあはれ

貫久

獨しも秋よあはれ
世中の

あつ—きんぎょをいそいでるわん
湯殿院とまゐる

忠介

とくあよ折り花のよめれ
娘の夢と成とるる華

好忠

秋虫ふ豆夫人心

子理

人されぬくこのあつ—

あつ—る人—

也秋款老

月

るくり秋のあつ—

老る心—のあつ—

貞應元年—

為

らひあつ—をいそいでるわん

すす—り秋のじ—

久安百々

謹

しとよ—く—り—

われ人知の月やささるる
る水や年毎のそり秋や

志家

却凡よるる心ははらへん

しるしるしのまやさるるん

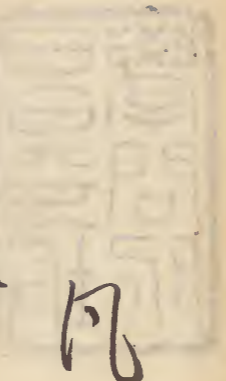
弘化二年内書百そ 信二信家

んしあしんさよ出は秋草の

雲のしげささるる

千の書あま 正二信家

人こそあれ庭のむくもさつた



家集

凡のそらふさあらの秋

西行

山里たあむの雲かみくささ

すしるるさ秋蝶のあ

百そ述懐 定家

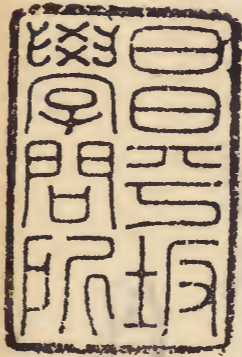
秋の日はりのゆし人の園なら

ささるるもあかり道なる

辛の秋子や梓多任年月

よのつら秋の表をさあけ

のゆるいしよのゆるいしよ
ゆるいしよのゆるいしよ



ゆるいしよのゆるいしよ
ゆるいしよのゆるいしよ
ゆるいしよのゆるいしよ
ゆるいしよのゆるいしよ
ゆるいしよのゆるいしよ

